

幼児の園生活と音楽の関わりを探る

平成30年度ゆめのもり保育園における観察記録からの中間報告

Relationship between nursery school life and music

Interim report from observation record at Yumenomori nursery school in 2018

鈴木由美子(千葉敬愛短期大学)

Yumiko SUZUKI

(Chiba Keiai Junior College)

(キーワード)

幼児の表現、幼児の生活と音楽、関わり、わらべうた、養成校

1. はじめに

保育現場において、幼児と音楽の関りはどのようなものだろうか。音楽はどのように使われているのだろうか。園によって、音楽に対する方針や使い方に相違はあるが、現場保育士がどのように音楽を提供し、幼児がどのように音楽を受け入れ、親しみ楽しんでいくのか。或いは、幼児の園生活の中でどのように表れて来るのか。

筆者の行っている授業(器楽Ⅰピアノ入門、器楽Ⅱ歌唱伴奏法)は、現場にどう結びついているのだろうか。

それを知るためには、まず無理なく自然体の園生活を知る必要があると考え、今回は園長田中朋子氏より許可を得て観察を行った。

2. 研究の目的

「ゆめのもり保育園」における幼児と音楽の関りを探り、現場保育士に必要とされる養成校の音楽授業を考察する。

3. 方法

千葉県船橋市認可保育園「ゆめのもり保育園」(4, 5, 6歳児クラス15名、担当男性保育士1名、補助1名)の生活を、平成30年度5月から3月(7月8月を抜いた)までの月3日程度(主に金曜日)午前中3時間観察し、記録する。

4. 「ゆめのもり保育園」

幼児と保育者と音楽の関り

「ゆめのもり」では、幼児が自然な姿でそこに在る。保育者が大きな声を出して、幼児に指示を出し従わせることはしていなかった。幼児の言葉を保育者は身をかがめ聞く。幼児の言葉に対して保育者の言葉も、静かで穏やかである。

その生活の中にある音楽は「わらべうた」であった。ピアノもギター伴奏もなく、保育者が大きな声を出して歌うのでもなく、その生活の中で自然に出る声量で歌っている。「歌う」というよりも「話しかける」ように。幼児の日常生活動作やその状況に合ったわらべ歌を、ピッチにも拘ることなく歌い易いピッチで歌っている。そこに幼児たちも寄ってきてお互いに顔を見合わせながら共に口ずさむ。

一日の活動の中にある音楽活動は、一日の始まりのきっかけを作る「季節の歌」であったが、特にこだわりはないようであった。伴奏はピアノであったり、ギターであったり様々であった。時には保育者が絵を描きながらその曲を歌い、子ども達が「覚えたい」と意欲を見せ、時には保育者が手作りした「メロンパン屋さんのバス」を使い歌っていく。幼児たちは、それぞれに手を挙げてから保育者の作成した紙でできたメロンパンを買いに行き、食べたら

そのメロンパンを返しに行く。

その間、保育者は静かに歌い続けながら常に幼児に目を向けている。

午前中の活動で公園遊びがあり、遊具の順番を待つ心はやる幼児たちに、保育者がわらべうたを歌いその1曲を交代の時間としていた。幼児たちは、自分たちも歌いながら待っていた。

「自分がやりたい」という気持ちを押さえながら、その場に居た幼児たちは彼らなりの秩序をもって、その「遊び」という活動に集中していた。

その帰り道(保育者2名幼児15名)、一人の幼児が「どんないろがすき」とふと口ずさんだ。途端に周りにいた幼児たちが様々に自分の好きな色を答える。歌い出した幼児に他の幼児から「もっと歌って」「長く歌って」と言われ、歌でやり取りをしていたが、結局歌い出した幼児は自分の好きな色を歌う事ができずつまらなくなった様に見える、周囲の幼児たちも歌うことを止めてしまった。また並んで歩きながら散り散りなことを始めた。それは自然な流れであったようにも見えるが、その場に付き添っていた保育者は関らず視線も下げず、ただ黙って歩いていた。

5. 考察

音楽は何か特別なことではなく、生活の中にあり、生活を豊かにするもの。その子なりの生活の秩序を守る糸口ともなると感じられた。

そこには保育者の楽器演奏技術を見せ、幼児を「歌わせる」音楽ではなく、音楽=歌うことを仲介とした様々なコミュニケーションと遊びがあった。また、大人の考える音楽そのものを表現するのではなく、音楽を使って自分の感情を表現したり、他の幼児の表現したものを受け取っていたと考えられる。

公園からの帰り道の様な場面において、保育者も共に歌い主導権を握り、「歌おう歌おう」声をかけ、歌い続けさせることが良いことであると考えているのではなく、歌うことが自然な流れで消えていく時にどのような関りを持てば良いのだろうか。そ

れとも、幼児の身に危険がない限りは自然に任せることが良いのだろうか。それとも単に保育者の見逃し、無関心であったのだろうか。

保育園は、幼児の生活の場である。「ゆめのもり保育園」は、保育者が決めた時間にいっせいにトイレ、食事という場面はなく、その子のリズムやしぐさと言った表現を見て、察して誘っていく。

その働きかけの手段に「わらべうた」を使った音楽との関りがあり、「わらべうた」による心の送受信が存在した。

そこに必要なことは、幼児から発信されていることを敏感にしかし穏やかに受信する保育者の感受性であると考えられる。

6. 現時点でのまとめ

養成校のピアノを教えている教員は、より完成された演奏を目指して授業を行いがちであるが、その伝え方(レッスンの方法)から導かれる学生の演奏は正否を求めるものであり、何かを表現しているものではない。

今回の保育の現場で必要とされている音楽の姿はその姿とは違っていた。主役は幼児である。大人の考える音楽ではなく、感じるそして伝える音楽であった。

現場では、どのように音楽を表現し、音楽を伝えるかではなく、幼児の生きていく上での経験として活かせる音楽が重要なのではないだろうか。それは、養成校の教員が学生に教えている「音楽」になる前の「音楽経験」=音楽を媒体として何かを伝えることではないだろうか。保育者と幼児の関係性、或いは自身のふとした気持ちの発露の、音楽を媒体とした表現活動とそれを見逃さず共に在る保育者を養成する音楽の授業が必要であると、現時点では考えるに至った。

今後、今年度下半期はゆめのもり保育園にて継続して観察を行う予定である。また千葉県内の幼稚園にも許可を頂き研究を続ける予定としている。